

Press Release

報道各位

2022年11月19日 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 公益財団法人ミモカ 美術振興財団

【第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ】 大賞・準大賞のお知らせ

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(MIMOCA)が開始した新たな現代美術の公募展 【MIMOCA EYE / ミモカアイ】。

「第1回 MIMOCA EYE /ミモカアイ」では294名(組)の応募があり、17名が入選しました。この度、2次審査を行い、入選作の中から大賞および準大賞作品を決定しましたのでお知らせいたします。

報道各社様におかれましては、この機会に広く告知いただきたくお願い申し上げます。

■大賞 ■準大賞

西條茜《Phantom Body -蜜と泉-》2022年

中谷優希《シロクマの修復師》2022年



授賞式の様子

大賞を受賞した西條茜さんには、副賞として2024年度以降に当美術館での個展開催の機会が授与されます。上記2点を含むすべての入選作を、展覧会「第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ でご紹介します。

[お問い合わせ先] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 公益財団法人ミモカ美術振興財団 担当:松村円 広報:奥本未世 〒763-0022 香川県丸亀市浜町80-1 Tel. 0877-24-7755 Fax. 0877-24-7766 www.mimoca.org E-mail. press@mimoca.jp



■大賞

西條茜《Phantom Body -蜜と泉-》2022年



撮影: 宮脇慎太郎

〈コンセプト〉

自と他、内と外の境界線はどこにあるのか。

私は身体性に着目した自身の制作において、陶磁器の特徴の一つである内部の空洞に息を吹き込むことで、身体や内臓感覚の延長・拡張を試みてきました。陶製の造形物に創世記さながら息を吹き込む時、身体と造形物は内部の空洞で繋がり、境界があやふやな一つの塊と化すようです。異なる存在として認識している「人とモノ」そして「人と人」の境界線は揺らぎ、また緩やかに繋がり、そこにはかつてマルセル・デュシャンが提唱したアンフラマンス(超薄)な関係性が生まれます。

日本には古来より器を愛でるという感覚があります。例えば湯飲みを両手で包み、数ミリの厚みを通してじわじわ伝わってくる茶の温かさや素地の質感を掌や唇で感じること。こういった日常の習慣から見ても陶磁器はとても身体性が強いアンフラマンスな素材だと私は考えています。

今作では水辺や花に集う生物のように、多孔性の陶造形にパフォーマーが集まりその穴に息や声を吹き込みます。作品を通して人々の間にある多様な距離感を可視化するとともに、触覚的な陶芸という素材や人の声や息を媒介にしたプリミティブなコミュニケーションの可能性を再考します。

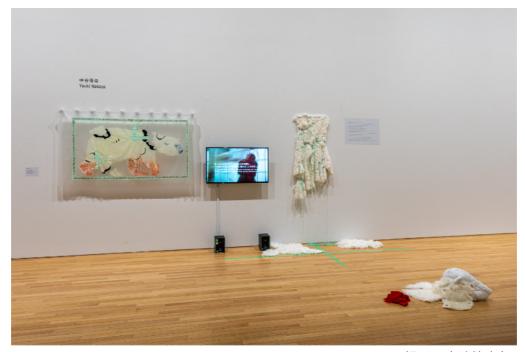
〈略歴〉

1989年兵庫県生まれ、京都府在住



■準大賞

中谷優希《シロクマの修復師》2022年



撮影: 宮脇慎太郎

〈コンセプト〉

動物園へ行った時、檻の中を一直線に往復し歩き続けるシロクマのミルクちゃんを見た わたしの家族が「あら、ミルクちゃん、あんたみたいでしょ」と言い、私たちは失笑し ました。

わたしは精神疾患を患っています。病の症状に呑み込まれた時のわたしに酷似したシロクマのその動きは、常同行動というそうです。この動きは、ストレスからくる動物の心の病、症状のようでした。

病や老いのように、人は誰でも、理性的な言動や行動がとれなくなる可能性を持っています。しかし、常に人は理性的であるというような、デカルト以降の近代的な人間像は、やむを得ない理由であっても、理性的な言動が取れない人を排除・攻撃してしまいます。

また症状やケアの持つ暴力性によって、病の当事者とケアをする人はまるで敵のように 分断されてしまうことがあります。しかし「私たち」が対峙すべきは症状であり、私た ち自身ではないのです。

「症状のような歩き回る動き」をシロクマとわたしの接続点とし、ケアの実践に必要な、「症状と人となりを分ける」という認識を体現することを目指しました。症状に翻弄されながらも、ケアにおける双方がその時の最善を見つけ、つくってゆく倫理の実践をシロクマとその支援者へ伝えていきたいです。

〈略歴〉

1996年北海道生まれ、東京都在住



■【MIMOCA EYE/ミモカアイ】概要

「アートとはその時代の答えであって、アーティストはこの現代をどう表現するのかという責任がある。それがコンテンポラリーアート。未来に向かってアーティストがどういうふうに方向づけ、今にないものを発見していくかっていう、一番大事で一番難しいことの結果を見せる美術館であってほしい」(猪熊弦一郎)

猪熊弦一郎のこの言葉を指針とするMIMOCAは、フレッシュな感性をもつ方々の才能に大いに期待しています。そこで、これからを担う若いアーティストが時代を捉えながら新しい表現を生み出し、独自の才能をはばたかせる起点となる場として公募展【第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ】を開催することとし、35歳以下のアーティストを対象として、ジャンルを問わず現代美術の作品を募集しました。



「主催]

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団

「選考委員〕

植松由佳(国立国際美術館学芸課長、公益財団法人ミモカ美術振興財団理事)

杉戸洋(画家、東京藝術大学美術学部絵画科准教授)

高橋瑞木(CHAT(Centre for Heritage, Arts and Textile)エグゼクティブディレクター 兼チーフキュレーター)

高嶺格(美術作家、多摩美術大学彫刻学科教授)

中山ダイスケ(東北芸術工科大学学長、アーティスト、アートディレクター)

※敬称略· 五十音順

■「第1回 MIMOCA EYE/ミモカアイ」 展覧会概要

会期 | 2022年11月20日(日)~2023年2月26日(日)

会場 | 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 3 階展示室C

主催|丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団

■入選作家・作品名(50音順・敬称略)

・池添俊《声を待つ》

- ・石綿優太郎《水の音色》
- ・井上裕加里《Asian women -Japan and Iran-》
- ・小穴琴恵《壁とはみ出た木》
- ・大野陽生《Sea Monk》
- ・上久保徳子《ずっと傾いたスープ》
- ・熊谷亜莉沙《あなたは誰だと思う?》
- ・西條茜《Phantom Body -蜜と泉-》
- ・ジダーノワ アリーナ《記憶の沿岸》
- ・須崎喜也《托鉢》 ・大東忍《夏草を燃やす》 ・但馬ゆり子《あなたにとって、わたしにとって。》
- ・谷口典央《New planet log 2》
- ・中谷優希《シロクマの修復師》
- ・原田愛子《Frankenstein's feet (for all of the sewers)》
- ・婦木加奈子《洗濯物の彫刻》
- ・吉田志穂《庭になるもの》